

二〇二〇年度 安田女子高等学校入学試験

国語

一 次の文章は、高田郁の小説「ふるさと銀河線」の一節です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

星子^{せいこ}は北海道の陸別中学の三年生。五年前、両親が交通事故で他界し、「北海道ちほく高原鉄道」の運転士をしている兄の康晃^{やすあき}と二人で生活している。星子は演技が好きで、演劇コンクールで優勝した経験もある。しかし、演劇の道に進みたい気持ちを抑えて、高校の福祉科へ進学し地元で福祉の仕事をするを考えている。そうしたある日、兄の勤める鉄道が、映画のロケに使われることになった。

「星子！」

「星子、星子！」

坂の下から和美と春菜が大声で呼んでいる。

「ロケ！ 映画のロケやってるよ！」

「分線の踏切んところ！」

早く早く、とふたりは懸命に手を振った。

普段は通るひとも殆ど^{ほとんど}ない踏切周辺にひとが溢^{あふ}れている。いずれも知った顔ばかりだ。

「ああ、星子ちゃん」

その姿を認めて、少しずつ道を譲ってくれるのは、星子に撮影現場を見せてやろうと思えばこそなのだろう。導かれるまま、人垣の前に出た。

見せ場の撮影なのか、スタッフが固唾^{かたず}を呑んで見守る中、テレビで馴染^{なじ}んだ人気の男優が相手役の頬を張る。手加減なしの、派手な音がした。

「一緒に行こう、って言ったじゃない。何処^{どこ}までも一緒に行こうって」

哀しい表情で男優に絡むのは、星子と四つしか違わない若い女優だった。

——ぼくたち一緒に行こう。みんなの本当の幸を探しに、何処までも何処までも一緒に行こう——

星子の耳もとに、星子自身の声が帰ってくる。映画のロケの現場のはずが、暗転して、真っ暗な舞台に立つ星子を、ピンスポットが眩^{まが}しく照らしていた。

封印したのに。

封印したはずなのに。

星子は自分の台詞^{せりふ}を追い払おうと、両の手で耳を塞いだ。

「あ、星子」

両耳を押さえたまま人垣から離れた星子に、和美と春菜は狼狽^{うろた}える。

星子、星子、と周囲を憚^{はばか}って呼ぶ友の声を振り切り、星子はその場を逃げ出した。

何処をどう歩いたのか、あまり記憶がない。気付けば大通りから本證^{ほんしょうじ}寺に続く長い階段の中ほどに座っていた。陽は落ちて、気温はぐっと下がり、いくらしっかり着込んでいるとはいえ、冷気は足もとから這^はい上がってくる。

目を転じれば、まだひとが残っているのか、町役場の明かりが洩れている。カナダの姉妹都市にちなみ「ラコム通り」と名付けられた道をオレンジ色の街路灯が照らす。役場の背後には、黒々とした山のシルエットが迫る。高い位置から見渡す陸別の夜は、静寂で **a** 厳かだった。

さすがに **B** 歯の根が合わなくなつて、星子はゆつくりと立ち上がり、階段を下りる。大通りを、こちらへ向かつてくる一台のワゴン車があった。運転手が星子を認めたのか、車は **b** 緩やかに徐行して路肩に止まった。

「星子ちゃんじゃないか」

窓が開いて、声をかけてきたのは、天文台の青柳だった。

「どうしたんだい、こんなところで」

優しく話しかけたものの、青年は階段の少女が今にも泣き出しそうなのに気付いた様子だった。仄かな笑顔は消えて、案ずる表情になる。

「乗って」

手を伸ばして助手席のドアを開け、青柳は星子に言った。

銀河の森天文台、という美しい名前を与えられた天文台のドーム内には、百十五センチの口径を持つ反射望遠鏡が据えられている。公開されている天体望遠鏡の中で日本最大級、と聞いたことがあった。

月曜日の今日は休館日のため、ほかにひとの姿はない。星子は望遠鏡の台座に浅く腰かけて、青柳に今日の校長室での遣り取り、そしてロケ現場での出来事をぼつりぼつりと語った。星子が語り終えるまで青柳は辛抱強く耳を傾けた。

「そうか、そんなことがあったんだ」

芳う声を受けて、星子は涙が零れそうになった。

「皆が陸別を離れていく。私まで出て行ったらどうなるの、とか。演劇をやつて大成できるワケない、とか。色々考えたら、頭の中がごちゃごちゃになって……」

初めて素直な気持ちを打ち明けて、星子は溢れだした涙を手の甲で力任せに払った。少女の様子を見守っていた青柳だが、見学者用のダウンコートを二着手に取ると、一着を星子に差し出して促した。

「寒いけど、ドームの外に出てみようか」

ドームの扉を抜けて、そのまま天文台の屋上へと出る。足もとは凍りつき、油断するとつるつると滑るから、二人は手すりにつきかりと掴まって天を仰いだ。

頭上に輝く天の川。大犬が小犬を追い駆け、オリオンは果敢に牡牛に立ち向かう。霞んでいるあれはプレアデス星団。ペルセウスにカシオペアの姿も見つけられた。まだ月の姿はなく、漆黒の舞台に立つ星座たちの競演を遮る雲の幕もない。

「なんて綺麗」

星子は手すりを持つ手に力を込め、背を逸らして天を仰いだ。

「この時期は一層、見ごたえがあるからね」

青柳は言つて、同じように背中を逸らした。

暫くの間、互いの存在も忘れて、星々の姿に見入る。物言わぬはずが、無数の瞬きがちちらに語りかけてくるようだった。

「この星に魅せられて、僕は東京からここに移ってきたんだ」

青柳は星子に聞かせる風でもなく、ぼつりと呟いた。

東京から、と星子は繰り返す。

ああ、と青柳は視線を天空から傍らの少女へ移して、緩やかに口もとを綻ばせた。

「僕の実家はね、東京で半世紀以上続く和菓子屋なんだよ。一人息子の僕は、けれど、どうしても星への思いを捨てられなかった。そして両親も、跡を継いでほしいという気持ちを封じて息子の思う道を選ばせてくれたんだ」

初めて知る話に、星子は思わず「**A**」を見張る。

「だからだろうね、僕には康晃君の気持ちだが、僕の両親のそれに重なって仕方ないんだよ」
切なさの滲む口調で言っ、青年は軽く首を振った。

星子は少し考え、やがて躊躇いがちに問いかけた。

「青柳さん、故郷の東京を出たこと、後悔してない？」

「してない」

一瞬の躊躇いもなく問いの答えを返したあと、それでは足りない、と思ったのか、青年は暫し考えて、こう言い添えた。

「これから年齢を重ねて、取り巻く状況が違って来ればまた別なのかも知れない。けれどそれでも、やっぱり後悔だけはするまい、と決めているんだ。僕の夢を知り、背中を押してくれたひとたちの思いを無駄にしないためにも、故郷を出たことを決して後悔しない」

天文技師の言葉は、少女の「　　」に沁みた。

会話は途切れ、ふたりは再び夜空を仰ぐ。

オリオン座のペテルギウス、小犬座のプロキオン、大犬座のシリウス。巨大な冬の大三角形の間を、長く尾を引いて星が流れた。それを機に、青年はおもむろに唇を解いた。

「故郷って、人間にとつての心棒なんだと思うんだ。そのひとの精神を貫く、一本の棒なんだよ、きつと」

星子は青年の言わんとすることを理解しようと、真剣な眼差しをその横顔に注いでいる。それに気付いて、青柳は少女に柔らかな笑みを投げかけた。

「町を去るひともあれば、戻るひともある。僕のように、新たにこの町に来るひとだっている。それでも、故郷という心棒を持たないひとはいないし、心棒があるからこそ、ひとは羽ばたく勇氣を持てるんだと思う」

羽ばたく勇氣、と低い声で星子は繰り返した。

星子の身体に流れる、両親や前の世代から脈々と受け継がれてきた血。陸別で過ごした日々。陸別で育んだ夢。そうしたものが星子を形作り、これからも星子を支え続けるに違いない。そう、たとえ陸別を離れたとしても

——ぼくたちは何処までだつて行ける切符を持っているんだ——

独り芝居の自身の台詞が、はつきりと耳に届く。

「羽ばたく勇氣……」

星子はもう一度、繰り返した。

(高田郁『ふるさと銀河線』)

問一 二重傍線部 a 「厳か」 b 「緩やか」の読みをひらがなで答えなさい。

問二 二重傍線部 A 「固唾を呑んで」 B 「歯の根が合わなくなつて」の、本文中の意味として最も適当なものをそれぞれ次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

A 固唾を呑んで

ア その場にいる人全員が、ひとつ所に集まること。 イ 相手の気持ちを盛り上げるために声援をおくること。

ウ 事のなりゆきが気にかかり息をとめて緊張すること。 エ しっかり相手を見るために前に身を乗り出すこと。

オ 感想を言葉で表現せずに心の中にしまうこと。

B 歯の根が合わなくなつて

ア 高い山に登つたため、息が切れている様子。 イ 歩き疲れて、うまく体が動かなくなっている様子。

ウ 陽が落ちて暗くなり、恐ろしさを感じている様子。 エ 夜が遅くなり、不安で泣きそうになっている様子。

オ 気温が下がり、寒さのあまり震えている様子。

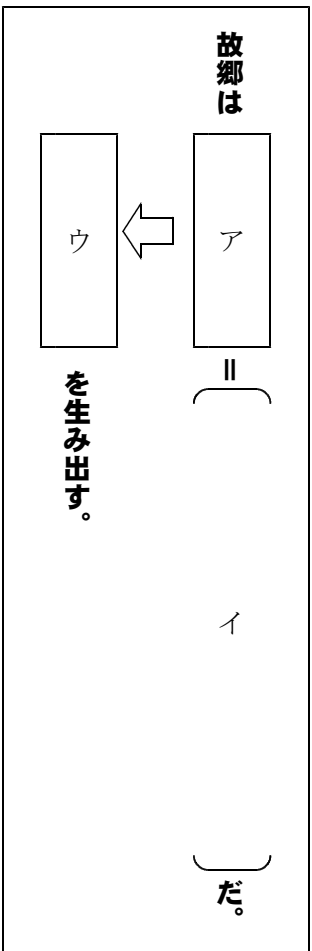
問三 波線部ア「　　」を見張る」イ「　　」に沁みた」の空欄に入る最も適当な語を、それぞれ漢字一字で答えなさい。

問四 次の文は、 「見せ場の撮影く両の手で耳を塞いだ。」の表現についての説明です。空欄「①」く「④」に入る表現を、①②は本文から抜き出し、③④はそれぞれの字数制限に合わせて自分で考えて答えなさい。

「①」という「②」の言葉をきっかけとして、星子の「③ 漢字二字」が始まり、星子が封印したはずの「④ 十五字以上二十字以内」。

問五 傍線部「封印したのに」とあるが、どのような思いから封印したのか。三十字以上四十字以内で答えなさい。（句読点なども一字に数える。以下の問いも同様。）

問六 青柳が星子に伝えたことを、次の図にまとめました。空欄アくウに入る語句を、後の条件に従って本文から抜き出しなさい。



条件

- ・「ア」は、単語で答えること。
- ・「イ」は、「ア」の言い換え。十五字以内で答えること。
- ・「ウ」は、五字以上十字以内で答えること。

一一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

もう数年前のことになりますが、京都大学がヨーロッパを調査するために何人かの学者を、欧州各地に派遣したことがあります。その一人がフランスの西北部のブルターニュ地方を訪れ、とある村の酒場に入って、この地方の歴史や伝統、そして言語などに詳しい人はいないだろうかと、隣にいた男にきいたのです。このブルターニュは同じフランスでも、かつてフランス人に征服されたケルト系の民族が未だに住んでいる地方で、経済的な中央の ^aハンエイからは見離された ^{*へんび}辺鄙な所です。言葉も以前はブレトン語という、別なものを使っていたのです。

さて京大の先生に相談をもちかけられた ^{くだん}件の男は、ポンと先生の肩をたたいて、「あんたは運がいい。あんたの探している人はこの俺だよ。俺がこの地方のことは一番詳しいんだ。そこいらにいる奴らはだめさ」と言ったものです。京大の先生は大喜びで色々と質問して別れましたが、次の日に別の所で同じ質問を他の男に向けて見ると、驚いたことにその男も、前日の酒場の男と全く同じ反応を示すではありませんか。何のことはない。1 「というわけです。」

日本人から見ると、^{*}米中ソのような超大国の国民が、自分たちの国は世界で一番大きい、強いぞと言うのなら、まだ分ります。また年とった村長さんか教育委員長でもあるならば、俺をおいて他に詳しい奴なんかいないよと言っても余り不思議に聞えませんか。ところが小さな国や境界の地に住むごく平凡な人の口から、そんなことを聞くととは想像も出来ないことです。

どうしてそうなのかの理由を簡単に言いますと、ユーラシア大陸の諸民族は程度の差こそあれ、どこの国の人も、自分の国が一番いい、大きいと思っっているのです。現実の客観的な大きさや強さで話をしていてのではありません。自分の国、いやひいては自分自身が世界の中心だと思っうのです。「2」人が生きて行くための価値体系の中心に自分を、自分の国を置くという自己中心的な考え方がどこでも普通なのです。そのような主観的な自己評価と客観的な事実との間に ¹ズレがあるとき、人はそれを ^{こぼなし}小咄に作

って笑うことになるのです。大切なことはこの国の誰もがそう思っているという事実があるという点です。

日本人ならどうでしょうか。例えば外国から客が来て、典型的な日本人に会いたい、代表的な日本の家を見学したいなどと言ったとき、私の家に来なさい、よそを見る必要なんかありませんよ。私と話をすれば他の誰とも会う必要はありませんよなどと言う人があるでしょうか。私は「3」逆だと思えます。大抵の人は尻込みして、私の家なんか狭くて汚くて、第一日本間なんてありやしないし、と言うようなことで、結局有名な日本料理屋か何かに案内して、これが典型的な日本の家ですとか、お茶を濁す始末になるのがオチでしょう。私こそ日本を代表する日本人であると平気で言う人もいないのではないのでしょうか。

日本人が自分の国である日本に対する態度もユーラシアの人々とは反対です。国土は狭いし資源はなし、生活程度もまだまだ、福祉は不十分といった具合に欠点を並べるのは上手でも、日本は世界で一番良い国です。こんな素晴らしい住み易い国はありませんよなどと外国人に向かって素面で言う人がいるのでしょうか。

要するに日本人は価値の基準を自分自身に置かず、他者にそれを求めるといふ他者基準的価値観を持っているのです。国のレベルでは、自分の国を世界の中心とは考えず、むしろ遅れて劣つたものと見る周辺主義なのです。このことは歴史的、地理的に理由のないことではありません。日本は太古から、高度に発達した大陸の文明のおこぼれにあずかるという構造になっついて、「4」長期間にわたって異民族に征服されたり迫害されるという経験を持ちません。そこで手ばなしで外国は良い、自分の国はダメだと言いつつ続けて来たのです。

しかしこのことは良し悪しの問題とは一応別の事実です。いや、このような精神のしくみを日本人が持ち続けたからこそ、今日のような素晴らしい経済発展をとげることが出来たと言えます。多くの民族が、自分の国が一番いい、強いと思って落着いていたために、外国にオカされ滅亡して行つたのです。日本人の絶えなき向上心とは、裏を返せば日本はダメだ、外国は素晴らしいという劣等感に他ならないのです。他人に負けまいとする競争心とは、要するに他人の方が自分よりいいということ認める他者基準の価値観があるからです。

劣等感を捨て、自己に満足するようになると、個人は落着き、社会は一時平和になりますが、やがてはチンタイするか強力な外国に征服されてしまうかのどちらかになります。

このように一つの国の人が、他国の人の質問にどう答えるかという一事を分析して見るだけでも、ことばの使い方は「5」と無関係でないことが分ると思えます。

* 辺鄙 都会から遠く離れていて便利が悪いこと。 (鈴木孝夫『ことばの人間学』)

* 米中ソ 米国(アメリカ)・中国・ソビエト連邦のこと。ソビエト連邦は一九九一年に解体し、現在のロシアなどの国に分かれた。

* 素面 酒を飲んでいない、ふだんの状態や態度。

問一 二重傍線部 a「ハンエイ」 b「オカ(され)」 c「チンタイ」のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 空欄「2」〜「4」に入る語をそれぞれ次の中から一つ選び、記号で答えなさい。(記号は一度しか用いない。)

ア 決して イ しかも ウ しかし エ つまり オ ところで カ むしろ

問三 空欄「1」に入れるのに最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア この地方に住む人々は複雑な歴史を持つブルターニュへの深い愛と広範な知識を持っていた

イ この地方の男は誰もが自分こそブルターニュの一番正統な代表人物だと自負していた

ウ この地方の人はみな注目されたいがために、知りもしないことを知っていると自慢する傾向があった

エ この地方は辺鄙な土地柄から、誰もが外国から来た人へのサービス精神が旺盛であった

オ 住人はたくさんいるにも関わらず、たまたま連続で自分が一番詳しいと自負する人物に遭遇した

問四 傍線部1「ズレがある」とあるが、次の文はその「ズレ」に関する説明です。空欄「①」「②」に合うように本文中の
ことばを用いて説明しなさい。

「① 三十字以上四十字以内」と「② 三十字以上四十字以内」とが異なっている。

問五 傍線部2「価値の基準を自分自身に置かず、他者にそれを求める」について、その具体例として最も適当なものを次の中
から一つ選び、記号で答えなさい。

ア キャプテンにふさわしいかどうか自信はないが、推薦されれば引き受けようと思っ話し合いの場に臨んだ。

イ 花屋で祖父の好きな花を思い浮かべながら花を選び、祖父の誕生日のお祝いの花束を用意した。

ウ 自分では微妙な点数だと思ったテストの結果を母に伝えると、意外にも母はとてもほめてくれた。

エ 食事をするために回転寿司店を訪れたが、回り続ける寿司の数々に目移りして一皿もとれなかった。

オ 家にあつた古い時計をチャリティーオークションに出品してみると、値段がつり上がっていった。

問六 傍線部3「このことは良し悪しの問題とは一応別の事実です」とあるが、この説明として最も適当なものを次の中から一つ
選び、記号で答えなさい。

ア 価値の基準を他者に置くことが良いか悪いかは別にして、日本人は自分たちの持つ価値に気づいていない。

イ 日本が大陸の文明のおこぼれにあずかってきたことが良いか悪いかは別にして、日本は素晴らしい経済発展をとげた。

ウ 「外国は良くて日本は悪い」と言うことが良いか悪いかは別にして、日本人は外国は良くて日本は悪いと考えている。

エ 本場に外国は良い国で日本は悪い国なのかは別にして、外国人は自分の国が一番良い、強いと思っている。

オ 国が国を征服することが良いか悪いかは別にして、世界ではお互いに征服したりされたりすることが起きている。

問七 空欄「 5 」に入れるのに最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人々の意識や価値観 イ 自分の国への愛着 ウ 社会や文化の成り立ち

エ それぞれの国の伝統 オ 各国の平和と発展

二二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

桓武天皇の御子であつた高陽親王は工作の上手な方であつた。彼が建てた京極寺の前の河原にあつた田は寺の領地
であつた。ある年、日照りが続いてあたりの田が全て焼けたようになってしまったのだが、この田も干上がり、苗も
皆枯れてしまった。

しかるに、高陽親王これを構へ、たまひけるやう、長け四尺ばかりなる童の左右の手に器を捧げて立てる形
けれども この対策をお考えになり、 身の丈四尺くらいの童子が 人形

を造りて、この田の中に立て、人その童の持ちたる器に水を入れるれば、盛り受けては即ち顔に流し懸くる構へ
仕掛け

を造りたりければ、これを見る人、水を汲みて、この持ちたる器に入れるれば、盛り受けて、顔に流し懸け流し懸
を作つたので、

けすれば、これを興じて聞き継ぎつつ、京中の人市を成して集まりて、水を器に入れて、見興じののしること
おもしうがって

限りなし。かくのごとくする間に、その水³おのづからたまりて、田に水多く満ちぬ。その時に童を取り隠しつ。

くろくろくろ

満ちた

また、水乾きぬれば、童を取り出して田の中に立てつ。しかればまた前のごとく人集まりて、水を入るるほどに、

くろくろくろ

田に水満ちぬ。かくのごとくしてその田つゆ焼けずしてなむ止みにける。

少しも焼けることなく終わった。

(『今昔物語集』)

問一 波線部 a 「たまひ」 b 「やう」の読みを、現代仮名遣いで答えなさい。

問二 傍線部 1 「顔に流し懸け流し懸けすれ」の主語を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 高陽親王 イ 子ども ウ 大人 エ 人形

問三 傍線部 2 「市を成して」の意味として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 商売に熱中して イ 大勢が寄って ウ 利益を得ようとして エ 中心に向かって

問四 傍線部 3 「おのづから」の意味として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分で イ 大量に ウ 自然と エ 少しずつ

問五 生徒が次のような会話をしました。空欄「①」「②」「③」「④」に入る表現を、それぞれの字数制限に合わせて自分で考えて現代語で答えなさい。

安田さん この話は高陽親王が、工作がうまくいったことを伝えるために紹介された例ね。

楠さん 高陽親王は日照りの被害から田を守るために「① 三十字以内」を作ったのよね。

安田さん この工作のいいところは人々が「② 五字以内」「田に水を入れるのではなく、「③ 五字以内」水を入れるものになっているところね。

楠さん そうね。その方が水をたくさん入れてもらえるよね。

安田さん この話が載っている『今昔物語集』には神様が雨を降らして日照りの被害から水田を救ったというお話もあるのよ。

楠さん それと比べるとこのお話は千二百年くらい前の話なのに、自然災害に「④ 五字以内」で対抗しようとしているから、現代的な感覚をもったお話ね。

